

第54回（平成28年度）北海道優良米生産出荷共励会審査報告

一般社団法人北海道米麦改良協会主催の第54回（平成28年度）北海道優良米生産出荷共励会の審査委員を代表して審査の概要を次の通り報告します。

1. 平成28年気象経過と水稻作柄

審査結果報告の前に、産米と密接に関係する平成28年度の作柄と水稻生育について、概略を述べます。

1) 作柄について

平成28年の北海道米の作柄は、多くの地域で平年作以上を確保し、6年連続となる豊作となりました。北海道農政事務所公表による全道の10a当たり平均収量は536キロ[㍓]（作況指数102）で、道南方面では、「やや不良」から「並」に留まるものの、主産地の上川、北空知、南空知は102、石狩は103の、「やや良」です。一方、農家や農業関係者の実感は「平年並～やや不良」のようです。

11月末日現在の穀物検査実績は、一等米率は、うるち米・もち米ともに90%前半で平年並ですが、白未熟粒の発生が多い地域もあり、これらの地域は、調製作業に時間がかかり、産米の出荷にも遅れが見られています。ホクレンによる仕分け集荷による低タンパク米（主要5品種、白米のタンパク質含有率6.8%以下）の割合は、全道平均で20%と昨年に比べ低く推移しています。品種別では「ふっくりんこ」が47%と高く、「ななつほし」、「ゆめぴりか」は20%程度です。ホクレン支所別の低タンパク米の出荷状況は俱知安、留萌支所が40%以上と高いですが、地域差が大きい状況です。

2) 気象経過と水稻の生育について

平成28年は、春先の好天により融雪が早く、播種・育苗および本田耕起・移植までは概ね順調でしたが、水稻の生育は6月の低温・日照不足で分けつが増加せず、初期生育は不良でした。6月6半旬以降は日照時間が多く、生育は回復し、幼穂形成期以降も分けつの発生が旺盛で、茎数は平年並に回復しましたが、遅発分けつの多い、分けつ構成となりました。

出穂期間の高温により穂揃期間は平年並でしたが、早期異常出穂により穂揃いが悪化した圃場も多く見られました。穂数は平年並でしたが、一穂粒数が平年よりやや少ないため、稔実粒数が平年並～やや少ない傾向でした。登熟初中期の高温・日照不足などにより、平年より白未熟粒の発生が多く、収量・品質に影響がでた地域も多かったようです。生育後半に土壤窒素が発現したためか、タンパク質含有率は昨年に比べてやや高くなりましたが、登熟前半の高温によりアミロース含有率が低くなり、食味は良好です。

また、病害虫による大きな被害を受けた地域はありませんでしたが、8月後半の台風の影響で、倒伏や水田への冠水・浸水・土砂流入など被害が一部の地域で見られました。収穫作業は、成熟期の遅れに伴い平年に比べ4日程度遅れて始まり、収穫期は3日遅れとなりましたが、作業は概ね順調に進みました。

以上のような生育経過で、最終的な北海道農政事務所発表の作況指数は「102」の「やや良」となりました。

2. 審査結果

本年は移植栽培の個人3部門、生産グループ1部門、直播栽培の個人1部門の合計5部門5件の出展がありました。各地区米麦改良協会がJA、地区農業改良普及センターと協議して提出した推薦調書に基づき、平成26～28年の過去3年の出荷実績や栽培管理について審査、採点しました。

次に受賞者の紹介と具体的な出荷実績、技術内容について述べます。

1) 移植栽培の部 最優秀賞受賞者

(1) 個人の部 第1部 (12ha以上)

★日本有数の極良食味地帯で奮闘する若い農業者

優秀賞は、吉田靖志氏（磯谷郡蘭越町、ようてい農協）が受賞しました。

日本有数の極良食味米生産地帯における水稲単作経営で、18.1ha（3カ年平均）を作付しています。基本技術に則り、適切な肥培管理の実践や、透排水性の良好な圃場条件を活かして町平均を上回る安定した収量を得るとともに、低タンパク米を7割以上出荷しています。

さらに今後の取り組みとして、減農薬等の特別栽培米を増やしていく予定であり、若い農業者として、今後、大いに期待が膨らむところです。

(2) 個人の部 第3部 (2ha以上6ha未満)

★地域の自然にとけこんだ安全安心な米作り

最優秀賞は、奥村俊也氏（沙流郡平取町、びらとり農協）が受賞しました。

水稲、施設園芸、転作田（牧草）の複合経営で、水田作付面積は4.4haです。ホクレン主催の「第2回ゆめぴりかコンテスト」で最高金賞を獲得したJAびらとりにおいて、びらとり米麦改良協会の会長を務めています。

夏期の気象条件が稲作にはやや不利といえる日高地域で、水田の透排水性改善を基本に、健苗育成から始まる基本技術の実践と組み合わせ、収量は高くないものの、高品質の「ゆめぴりか」「ななつぼし」を生産しています。また、自らYES!cleanの認証を取得し、地域における安全安心な米作りを推進するとともに、防除受託組織を利用して、病虫害防除における省力化をはかっています。

施設園芸のトマトの作付期間が長いため、作業に余裕の持てる水稲経営面積とすることや、地域における水田の役割を十分に理解して、稲わら・籾殻の有効利用による地域資源循環型経営を行っています。

(3) 個人の部 第4部もち米 (2ha以上)

★地域の水田維持と高品質もち米の安定生産に貢献

最優秀賞は、木下尚広氏（天塩郡遠別町、オロロン農協）が受賞しました。

水稲、小麦の複合経営で、水稲作付面積は14.3ha（3カ年平均）です。水田の透排水性改善、適正な水管理のための畦塗り、健苗育成、適期移植、適期収穫等の基本技術を守りながら、初期生育を重視した、適正な茎数・穂数の確保により、収穫期に仕上がりの良い稲となるよう努めています。また、収量・品質の向上のため、試し刈りにおける整粒歩合等を参考に圃場の刈り取り順を決め、もち米生産（風の子もち）における収量性と品質の高位安定化に努めています。

収穫作業は、3戸共同でコンバイン、トレーラー等を使用し、乾燥調製もすべて地域のライス

センターに搬入することにより、農業機械・施設への投資を可能な限り抑制してコスト削減に努めるとともに、水稲以外の品目も含めた複合経営の観点から、作業性等を考慮し、総合的に無理の無い再生産可能な営農を念頭において経営しています。

(4) 生産グループの部

第1部うるち米 (50ha以上)

★安全安心な米作りを担う、地域の先進的な生産グループ

最優秀賞は、JAあさひかわ特別栽培米部会（旭川市、あさひかわ農協）が受賞しました。

32戸（平成28年度）の生産者からなる生産グループで水稲作付面積は547ha（3カ年平均）です。作付面積の38%程度を特別栽培、YES!clean等の減農薬米生産にあて、収量は高くないものの「ゆめぴりか」「ななつぼし」を中心にした高品質米を安定的に生産しています。

作付面積が大きい部会員も多いことから育苗では置床鎮圧育苗を導入しており、育苗期間における労力軽減・人件費削減につなげています。

基盤整備事業による水田区画の大規模化に伴い、GPS自動操舵装置を導入し、農作業時間の削減と省力化による作業効率の向上を図るとともに、規模拡大と水田面積の維持を目的に、水稲直播栽培や疎植栽培を導入して、育苗期間の労力分散、省力化および経費削減につなげています。

減農薬栽培に関しては、慣行栽培においても農薬成分回数11回以内（クリーン米）の取り組みが定着しています。さらに、部会の新たな取り組みとして平成27年より、農場の生産工程を管理するJGAP認証に取組み、平成28年現在7戸の農家で取得し、安全・安心な米生産に積極的に取り組んでいます。

2) 直播栽培の部 最優秀賞受賞者

(1) 個人の部 第1部 (6ha以上)

★直播栽培へのポリシーを貫く、頑固な生産者

最優秀賞は、長谷浩幸氏（雨竜郡妹背牛町、北いぶき農協）が受賞しました。

水稲、畑作の複合経営で、水稲作付面積が15.19ha（3カ年平均）のうち直播栽培が7.63ha（3カ年平均）です。妹背牛町水稲直播研究会の中心的なメンバーであり、早生良食味品種「ほしまる」を用いた湛水直播栽培を導入しています。圃場の特徴を熟知した上で、自ら圃場の改善を実施して収量・品質の高位安定化につなげています。技術的にも、基本技術の実践に加えて、独自の工夫により早生品種でありながら高い収量（10俵/10a程度）を確保しており、タンパク質含有率も7%台にとどめています。

長谷氏の経営の中では、水稲収入の半分以上を直播が占めており、経営に対する影響が大きく、直播栽培に対するご自身のポリシーは、移植より生育が不安定な直播だからこそ手間暇を掛けなければ「所得」には返ってこないため、「直播は省力・低コストだから収量が低くても良い」という考えには大反対で、絶対に手を抜かず、高収量を維持しています。

最後に受賞者に共通する技術的な項目について以下にまとめてみます。

融雪促進、溝掘りによる表面水の除去、心土破碎および稲わらの搬出による透排水性の改善対策、これらは全て乾田化を実現するための基本技術です。乾田化により土壌物理性が改善され透排水性が向上するとともに、乾土効果の発現による旺盛な初期生育が期待できます。これらは全て収量、品質、食味の高位安定化に結びつく重要な必要条件であるとともに、北海道米というブ

ランドを維持するために必須の基本技術です。もちろん、生育ステージごとの的確な栽培管理技術が重要なことは言うまでもありません。

また、有利販売を目指した減農薬栽培に代表される特別栽培米生産の取組等は今後の一つの方向性を示していると思われます。

審査対象となった平成26年、27年、28年はともに豊作年ではありましたが、特に27年、28年は気象条件に助けられた年でした。気象や生育が様々に変動した中で、各自が基本技術を忠実に実践した上で、技術の工夫を重ねて良質良食味米の安定生産に努力していました。その積み重ねによって収量と品質が安定し、北海道米全体の品質向上、評価を高める地道な推進力となっています。

終わりに本共励会に参加頂いた関係者各位の生産努力に心から敬意を表して審査報告といたします。

第54回（平成28年度）北海道優良米生産出荷共例会審査委員長
北海道農政部生産振興局技術普及課（農業研究本部技術普及室）

上席普及指導員（農業革新支援専門員） 藤 田 雅 久